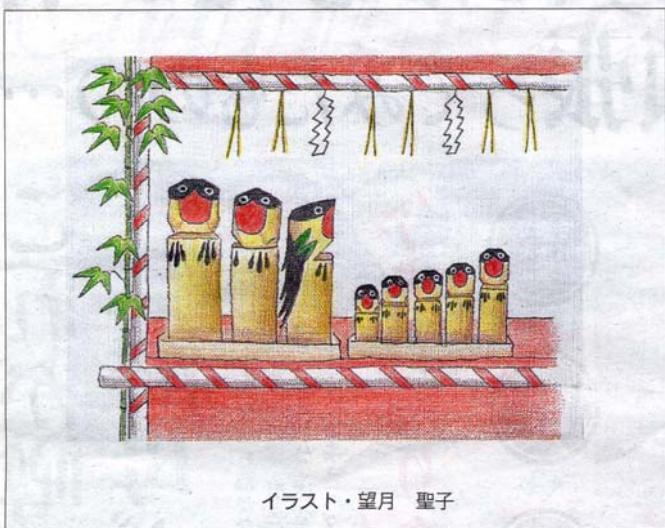


多摩の野鳥たち 1

国松 俊英

野鳥観察を始めて三十数年になります。野鳥たちが懸命に生きて姿を見ていると元気が出てきます。鳥の文化史、鳥と人間の関わりに興味を持っています。研究しています。今週から多摩の各地にすむ野鳥たちのことを綴っていきます。一回目に取り上げるのは、ウソです。

1月の高尾山へ、バードウォッチングが初めての友人と出かけました。1号路をゆっくり歩いて登っていくと、ウソの小さな群れを見つけました。望遠鏡にウソを入れて、友人に教えるのと、「ウソー」と叫んだので苦笑してしまいました。友人は、ウソという名の鳥がいると思っていなかったのです。



イラスト・望月 聖子



「母へのハガキ絵」(日貿出版社)等がある。

イラスト画家紹介

1月の高尾山ではヤマカガシ、エナガ、メジロ、ホオジロ、アオゲラなどたくさん鳥を見つけました。けれど友人たちは、さいしよに見たウソがすっかり気に入ったようでした。

もちつき・きよこ 1944年静岡県生まれ。桑沢デザイン研究所卒業後、イラストの仕事に。朝日立川カルチャースター講師。著書に色鉛筆で描いた

ウソ



田中忠義さん撮影

鶯替えの木彫りは受験のお守り

うそではありませんが、冬の林や低い山に行けば、この鳥はしっかりと観察できます。ウソはスズメよりやや大きくて、頭は黒く灰色です。オスの頬からのどは、美しい紅色です。山の林で繁殖しますが、秋から冬には山から平地に下りてき

て、数羽から十数羽の小さな群れで生活しています。この鳥は、フィー、フィーと鳴き、口笛に似たような鳴き声です。「うそを吹く」とは、口笛を吹くとか、フウフウ息を吐くという意味で、そこからこの鳥の名はつけられました。

著者紹介



くにまつ・としひで 1940年滋賀県生まれ、町田市在住。児童文学作家。童話や児童小説を始め、自然や野鳥、人物をテーマにしたNFを手がけている。主な作品に『カラスの大研究』『星野道大物語』『最後のトキ、ニッポニアニッポン』など。近刊は板橋区ホテル銅育施設長を書いた『ホテルがすきになった日』。

「鶯(うそ)替え」という神事があります。九州・大宰府天満宮では毎年1月7日に行われます。1年間手元においた木彫りのウソを神社に納め、代わりの新しいウソを頂いてきます。前年の凶を「ウソ」にして吉を取り替えるという意味です。

それから入びとは、ヤナギの木で作った鳥のウソを持ち寄り、年に一度交換するようになったといわれています。今では木彫りのウソは受験生の合格のお守りになっています。鶯替えの日、神社は受験生の親たちでいっぱいです。

ウソの食べものは、木の芽、草の種、花のつぼみ、昆虫などです。石川県金沢地方には、「雪の深い年にはウソが多い」という俗信があります。山地に雪が深くて、草木の実り方が少なく、それも食べつくした時に、ウソは群れになって平地に下りてきます。そして公園のサクラをみんな食べてしまふのです。

昔、太宰府天満宮の社殿の柱に巣食っていた虫を、ウソがすっかり食べてくれたことがありました。また、鬼すべという神事の際に、大きなクマバチが飛んできて邪魔をしましたが、それもウソが退治してくれました。

東京の鶯替え神事

東京地方では江東区亀戸の亀戸天神で、毎年1月24・25日の両日に鶯替え神事が行われます。木彫りのウソ(イラスト参照)は吉兆を招き、開運、出世、幸運を呼ぶとされてきました。両手で抱えるような大きなウソ鳥から、マツ

千棒くらいのウソ鳥までいろいろあります。鶯の字が學の字と似ていること、天神様は学問の神様であることなどで木彫りのウソは、受験生のお守りとなりました。文京区湯島の湯島天神、台東区上野公園の五條天神社でも、1月25日に鶯替え神事が行われます。